RIBEN XIANDAI DUANPIANMINGZUO SHANGXI

日本现代短篇名作赏析

○由同来 编著

南开大学出版社

日本现代短篇名作赏析

由同来　编著

南开大学出版社
天　津

图书在版编目(CIP)数据

日本现代短篇名作赏析 / 由同来编著. —天津:南开大学出版社,2005.6(2006.3 重印)

ISBN 7-310-02315-3

Ⅰ.日... Ⅱ.由... Ⅲ.短篇小说—文学欣赏—日本—现代 Ⅳ.I313.074

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2005)第 022490 号

版权所有 翻印必究

南开大学出版社出版发行

出版人:肖占鹏

地址:天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码:300071

营销部电话:(022)23508339 23500755

营销部传真:(022)23508542 邮购部电话:(022)23502200

*

南开大学印刷厂印刷

全国各地新华书店经销

*

2005 年 6 月第 1 版 2006 年 3 月第 2 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 10.25 印张 293 千字

定价:20.00 元

如遇图书印装质量问题,请与本社营销部联系调换,电话:(022)23507125

前　言

进入二十一世纪，我国高校为培养全面、高素质人才，都在不断探索新的教学模式和开设新的课程。可以说，这是一项深化教育改革，推进素质教育的重要举措。目前，各外语院校正在竞相开设的文学鉴赏课，就是其中不可缺少的一环。

众所周知，优秀的文学作品都是作家对社会人生进行体验感悟的结晶。它们有的抒发了崇高的理想与感情，使人奋发激励，纯洁向上；有的寄寓着深刻的人生哲理，使人增添智慧，知道该如何面对复杂的社会人生；有的进入到人们感情的皱襞与意识的深处，使人了解到隐秘在人类心灵深处的恶，从而产生从丑恶逃脱出来的弹力。正如我国现代文学大师鲁迅先生所言：文学能“涵养人之神思”，能“美吾人之性情，崇大吾人之思理”，能“斯益人生”，使人“历历见其优胜缺陷之所存，更力就于圆满”。因此，通过阅读欣赏文学作品，不仅可以从中获得愉悦和美的享受，而且还可以启迪心灵，丰富精神，陶冶情操，并从中得到如何面对现实与人生的启示。

笔者在多年的教学实践中深深地感到，日语专业高年级学生经两年基础日语的学习，虽已具备阅读日语原文文学作品的能力，但是，由于还未学会和掌握分析作品的方法，致使在阅读过程中，还无法解读出作者是想借助什么样的艺术形象和技巧，来传达出其在作品中所要表达的主题思想。所以，普遍存在着对日本文学感到味同嚼蜡，不值一读的错误看法。甚至，对分别于 1968 年和 1994 年获得诺贝尔文学奖的川端康成和大江健三郎的作品，也持此种观点。为改变这种现状，笔者近几年来，花费了大量时间和精力，搜集阅读研究了大量的相关资料，并在天津外国语学院日语系领导的关怀和支持下，于去年为三年级本科生开设了“日本现代文学鉴赏课”。因为在鉴赏过程中，最好需要一个完整的欣赏文本，所以决定选取短篇小说名作，作为教材。这相对于长篇小说的

节选，更有利于学生理解和把握作品的主题、人物性格及艺术特色。通过短篇名作的赏析，旨在使学生能领略到日本文学的纤细精美高深之处，了解到川端和大江能获得诺贝尔文学奖决非偶然，日本现代文学在世界文学中也占有一席之地。通过上这门课，学生普遍反映，在不同程度上提高了鉴赏分析作品的能力，拓宽了视野，也学到了地道、漂亮的日语，对写作及今后撰写毕业论文都很有帮助。今天，《日本现代短篇名作赏析》这本教材能够出版问世，也为读者架起了一座了解日本现代文学的桥梁。这应完全感谢南开大学出版社及张华老师的鼎力相助。

本书收入的10篇脍炙人口的现代短篇名作，皆出自名家之手。它们都是在各自所属文学流派上独领风骚的代表作。这些小说也是日本高中国语及大学文学选读课本中必选的篇目。**川端康成的《伊豆舞女》**在日本曾多次被改编成电影，搬上银幕，它以川端文学特有的哀伤凄婉之美，不知感动了几代年轻人的心。小说通篇洋溢着青春的诗意和抒情的气息，成为日本青春文学中不可多得的佳作。**大江健三郎的《鸟》**同其获奖作品《个人的体验》一样，充分展现了其文学世界中自我拯救主题的独到之处。他以独具匠心的构思和丰富的想象力，把青年人在成长过程中普遍都要经历的“走出幻想，面对现实”这一痛苦心路历程和如何适应社会的严肃问题，淋漓尽致地描绘出来。**森鸥外的《高濑舟》**与**芥川龙之介的《罗生门》**，开日本历史小说创作之先河。前者采用“尊重历史”的创作方法，在客观转述神泽贞干所著的随笔集《翁草》中的有关流放罪犯故事的过程中，经艺术加工，巧妙地反映出无欲知足与安乐死的主题。后者取材于日本中世文学中的一部故事集《今昔物语》，作者以历史上的离奇故事为外衣，通过独特的艺术构思，运用娴熟的技巧，以理智的思考来捕捉和反映现代人的自私、冷漠与无情。以期达到以古喻今，针砭时弊之目的。**叶山嘉树的《水泥桶中的一封信》**，是日本无产阶级文学的代表作。在小说中，作者用凝练准确的语言，并借助具体可感的艺术形象，为资本主义制度吃人的本质，做了鲜明的形象注脚。同时，作者还运用对比的手法，鲜明地描绘出主人公在血淋淋的残酷现实面前，由不觉悟到逐渐觉醒的变化过程。小说所反映的社会深度和广度，是当时日本的私小说无法比拟的。**志贺直哉的《在城崎》**，在日本被誉为心境

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小说之典范。也有人称它是一篇对生与死进行深层阐释的思想小说。作者不愧为日本现代文学大师，在描写自己受伤后到城崎疗养时，目睹小动物之死的平淡无奇的故事中，蕴藏着深刻隽永的思想。作者并未局限于对小动物之死的表象描写，而是以其敏锐的观察力，透过表象，巧妙地把笔深入到其内心世界里进行剖析，并利用对动植物的描写，来直抒胸臆，表露心境，把对生与死的独特思考以及对人生的感悟，含蓄而深刻地表现出来。**野间宏的《脸上的红月亮》**，可谓是战后小说中的压卷之作。他是日本“战后派文学”的领军人物。在作品中，他没有直接描写战场上杀戮流血的场面，而是把笔触深入到人物的内心世界与精神领域里，去挖掘战争对人性、人的心灵及对战后日本社会的影响。从而将小说中的爱情悲剧拓展到考问战争这一主题上来。它强烈地表明了作者对扼杀人性、摧残心灵的侵略战争的抗议和批判。**原民喜的《夏天的花》**，是日本战后文坛上涌现出的“原子弹文学”中的不朽名篇。它通过描写原子弹轰炸给日本人民带来的惨绝人寰的深重灾难，来揭露和声讨日本军国主义发动的侵略战争的罪恶。**安部公房的《赤茧》**，曾获第二次战后文学奖，它构思奇特，立意精深，寓意深刻。作者擅长运用人物变形的荒诞描写，来揭示资本主义制度中存在的荒谬异化现象。他享有“日本的卡夫卡”之美誉，是在日本现代作家中，为数不多的在海外拥有众多读者的著名作家之一。在《赤茧》中，通过人变蚕茧这一荒唐怪诞的故事，作者着力在反映：在资本主义社会里，最直接创造社会财富的无产者却被社会遗弃疏远这一荒谬异化的不合理现象。表明了作者对资本主义制度的强烈不满和否定。**远藤周作的《白种人》**在日本现代文学中，可以说是独树一帜，别具一格的。它于 1955 年获第三十三届介川文学奖。作者在作品中站在天主教的立场上，审视和探讨了现代人灵魂的归属和拯救的问题，指出：当罪孽深重的人醒悟之时，就会得到上帝的恩宠，从而得到拯救。

本教材是作为大学日语专业高年级教材编写的，亦可供有一定日语基础的学习者参考使用。**为便于阅读与欣赏，每篇作品后，均附有词语注释、作者简介、代表作指南和详尽的赏析文章**。编写这本教材的初衷，是想通过日本现代文学中的这些短篇佳作和笔者的赏析文章，使读者能

够了解和领略到日本的社会现实、日本现代文学的概貌以及日本文学中的纤细精美之处，借以开阔视野，提高分析鉴赏作品的能力。然而，由于本人中、日文根基薄弱，水平有限，难以如愿。不足偏颇谬误之处，望请同行及读者不吝批评指正。

由同来

2004 年 12 月

目　录

第一课　《伊豆の踊り子》……川端康成（1）
一、本文……（1）
二、語釈……（25）
三、略歴と文学……（27）
四、代表作ガイド……（29）
五、《伊豆舞女》赏析……（36）
第二课　《高瀬舟》……森鷗外（42）
一、本文……（42）
二、語釈……（54）
三、略歴と文学……（55）
四、代表作ガイド……（57）
五、《高濑舟》赏析……（62）
第三课　《羅生門》……芥川竜之介（68）
一、本文……（68）
二、語釈……（76）
三、略歴と文学……（78）
四、代表作ガイド……（80）
五、《罗生门》赏析……（85）
第四课　《セメント樽の中の手紙》……葉山嘉樹（91）
一、本文……（91）
二、語釈……（94）

三、略歴と文学……(96)
四、代表作ガイド……(98)
五、《水泥桶中的一封信》赏析……(100)
第五课　《城の崎にて》……志賀直哉（104）
一、本文 ……(104)
二、語釈 ……(110)
三、略歴と文学 ……(112)
四、代表作ガイド ……(114)
五、《在城崎》赏析……(124)
第六课　《顔の中の赤い月》……野間宏（129）
一、本文 ……(129)
二、語釈 ……(158)
三、略歴と文学 ……(159)
四、代表作ガイド ……(162)
五、《脸上的红月亮》赏析……(168)
第七课　《夏の花》……原民喜（173）
一、本文 ……(173)
二、語釈 ……(188)
三、略歴と文学……(190)
四、代表作ガイド ……(191)
五、《夏天的花》赏析……(193)
第八课　《赤い繭》……阿部公房（198）
一、本文 ……(198)
二、語釈 ……(201)
三、略歴と文学 ……(203)
四、代表作ガイド ……(205)

五、《赤茧》赏析 ……(207)
第九课　《白い人》 ……遠藤周作 (211)
一、本文 ……(211)
二、語釈 ……(265)
三、略歴と文学 ……(267)
四、代表作ガイド ……(269)
五、《白种人》赏析……(279)
第十课　《鳥》 ……大江健三郎 (284)
一、本文 ……(284)
二、語釈 ……(297)
三、略歴と文学 ……(299)
四、代表作ガイド ……(302)
五、《鸟》赏析……(314)
主要参考文献 ……(318)

第一课　伊豆の踊子

川端康成

一、本文

一

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白の着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけていた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。修善寺温泉に一夜泊り、湯ヶ島温泉に二夜泊り、そして朴歯の高下駄で天城を登って来たのだった。重なり合った山々や原生林や深い渓谷の秋に見惚れながらも、私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲った急な坂道を駈け登った。ようやく峠の北口の茶屋に辿りついてほっとすると同時に、私はその入口で立ちすくんでしまった。余りに期待がみごとに的中したからである。そこに旅芸人の一行が休んでいたのだ。

突っ立っている私を見た踊子が直ぐに自分の座蒲団を外して、裏返しに傍へ置いた。

「ええ……。」とだけ言って、私はその上に腰を下した。坂道を走った息切れと驚きとで、「ありがとう。」という言葉が咽にひっかかって出なかったのだ。

踊子と真近に向い合ったので、私はあわてて袂から煙草を取り出した。踊子がまた連れの女の前の煙草盆を引き寄せて私に近くして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くれた。やっぱり私は黙っていた。

踊子は十七くらいに見えた。私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。それが卵形の擦々しい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和していた。髪を豊かに誇張して描いた、稗史的な娘の絵姿のような感じだった。踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が二人、ほかに長岡温泉の宿屋の印半纏を着た二十五六の男がいた。

私はそれまでにこの踊子たちを二度見ているのだった。最初は私が湯ヶ島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会った。その時は若い女が三人だったが、踊子は太鼓を提げていた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情が自分の身についたと思った。それから、湯ヶ島の二日目の夜、宿屋へ流して来た。踊子が玄関の板敷で踊るのを、私は梯子段の中途に腰を下して一心に見ていた。——あの日が修善寺で今夜が湯ヶ島なら、明日は天城を南に越えて湯ヶ野温泉へ行くのだろう。天城七里の山道できっと追いつけるだろう。そう空想して道を急いで来たのだったが、雨宿りの茶屋でぴったり落ち合ったものだから、私はどぎまぎしてしまったのだ。

間もなく、茶店の婆さんが私を別の部屋へ案内してくれた。平常用はないらしく戸障子がなかった。下を覗くと美しい谷が目の届かない程深かった。私は肌に粟粒を拵え、かちかちと歯を鳴らして身震いした。茶を入れに来た婆さんに、寒いと言うと、

「おや、旦那様お濡れになってるじゃございませんか。こちらで暫くおあたりなさいまし、さあ、お召物をお乾かしなさいまし。」と、手を取るようにして、自分たちの居間へ誘ってくれた。

その部屋は炉が切ってあって、障子を明けると強い火気が流れて来た。私は敷居際に立って躊躇した。水死人のように全身蒼ぶくれの爺さんが炉端にあぐらをかいているのだ。瞳まで黄色く腐ったような眼を物憂げに私の方へ向けた。身の周りに古手紙や紙袋の山を築いて、その紙屑のなかに埋もれていると言ってもよかった。到底生物と思えない山の怪奇を眺めたまま、私は棒立ちになっていた。

「こんなお恥かしい姿をお見せいたしまして……。でも、うちのじじいでございますから御心配なさいますな。お見苦しくても、動けないのでございますから、このままで堪忍してやって下さいまし。」

そう断わってから、婆さんが話したところによると、爺さんは長年中風を患って、全身が不随になってしまっているのだそうだ。紙の山は、諸国から中風の養生を教えて来た手紙や、諸国から取り寄せた中風の薬の袋なのである。爺さんは峠を越える旅人から聞いたり、新聞の広告を見たりすると、その一つをも洩らさずに、全国から中風の療法を聞き、売薬を求めたのだそうだ。そして、それらの手紙や紙袋を一つも捨てずに身の周りに置いて眺めながら暮して来たのだそうだ。長年の間にそれが古ぼけた反古の山を築いたのだそうだ。

私は婆さんに答える言葉もなく、囲炉裏の上にうつむいていた。山を越える自動車が家を揺すぶった。秋でもこんなに寒い、そして間もなく雪に染まる峠を、なぜこの爺さんは下りないのだろうと考えていた。私の着物から湯気が立って、頭が痛む程火が強かった。婆さんは店に出て旅芸人の女と話していた。

「そうかねえ。この前連れていた子がもうこんなになったのかい。いい娘になって、お前さんも結構だよ。こんなに綺麗になったのかねえ。女の子は早いもんだよ。」

小一時間経つと、旅芸人たちが出立つらしい物音が聞えて来た。私も落着いている場合ではないのだが、胸騒ぎするばかりで立ち上る勇気が出なかった。旅馴れたと言っても女の足だから、十町や二十町後れたって一走りに追いつけると思いながら、炉の傍でいらいらしていた。しかし踊子たちが傍にいなくなると、却って私の空想は解き放たれたように生き生きと踊り始めた。彼等を送り出して来た婆さんに聞いた。

「あの芸人は今夜どこで泊るんでしょう。」

「あんな者、どこで泊るやら分るものでございますか、旦那様。お客があればあり次第、どこにだって泊るんでございますよ。今夜の

宿のあてなんぞございますものか。」

甚だしい軽蔑を含んだ婆さんの言葉が、それならば、踊子を今夜は私の部屋に泊らせるのだ、と思った程私を煽り立てた。

雨脚が細くなって、峰が明るんで来た。もう十分も待てば綺麗に晴れ上ると、しきりに引き止められたけれども、じっと坐っていられなかった。

「お爺さん、お大事になさいよ。寒くなりますからね。」と、私は心から言って立ち上った。爺さんは黄色い眼を重そうに動かして微かにうなずいた。

「旦那さま、旦那さま。」と叫びながら婆さんが追っかけて来た。

「こんなに戴いては勿体のうございます。申訳ございません。」

そして私のかバンを抱きかかえて渡そうとせずに、幾ら断わってもその辺まで送ると言って承知しなかった。一町ばかりもちょこちょこついて来て、同じことを繰り返していた。

「勿体のうございます。お粗末いたしました。お顔をよく覚えて居ります。今度お通りの時にお礼をいたします。この次もきっとお立ち寄り下さいまし。お忘れはいたしません。」

私は五十銭銀貨を一枚置いただけだったので、痛く驚いて涙がこぼれそうに感じているのだったが、踊子に早く追いつきたいものだから、婆さんのよろよろした足取りが迷惑でもあった。とうとう峠のトンネルまで来てしまった。

「どうも有難う。お爺さんが一人だから帰って上げて下さい。」と私が言うと、婆さんはやっとのことでカバンを離した。

暗いトンネルに入ると、冷たい雫がぽたぽた落ちていた。南伊豆への出口が前方に小さく明るんでいた。

二

トンネルの出口から白塗りの柵に片側を縫われた峠道が稲妻のように流れていた。この模型のような展望の裾の方に芸人達の姿が見えた。六町と行かないうちに私は彼等の一行に追いついた。しかし急に歩調を緩めることも出来ないので、私は冷淡な風に女連を追い

越してしまった。十間程先きに一人歩いていた男が私を見ると立ち止った。
「お足が早いですね。――いい塩梅に晴れました。」
私はほっとして男と並んで歩き始めた。男は次ぎ次ぎにいろんなことを私に聞いた。二人が話し出したのを見て、うしろから女たちがばたばた走り寄って来た。
男は大きい柳行李を背負っていた。四十女は小犬を飼いていた。上の娘が風呂敷包、中の娘が柳行李、それぞれ大きい荷物を持っていた。踊子は太鼓とその枠を負うていた。四十女もぼつぼつ私に話しかけた。
「高等学校の学生さんよ。」と、上の娘が踊子に囁いた。私が振り返ると笑いながら言った。
「そうでしょう。それくらいのことは知っています。島へ学生さんが来ますもの。」
一行は大島の波浮の港の人達だった。春に島を出てから旅を続けているのだが、寒くなるし、冬の用意はして来ないので、下田に十日程いて伊東温泉から島へ帰るのだと言った。大島と聞くと私は一層詩を感じて、また踊子の美しい髪を眺めた。大島のことをいろいろ訊ねた。
「学生さんが沢山泳ぎに来るね。」と、踊子が連れの女に言った。
「夏でしょう。」と、私が振り向くと、踊子はどぎまぎして、
「冬でも……。」と、小声で答えたように思われた。
「冬でも?」
踊子はやはり連れの女を見て笑った。
「冬でも泳げるんですか。」と、私がもう一度言うと、踊子は赤くなって、非常に真面目な顔をしながら軽くうなずいた。
「馬鹿だ。この子は。」と、四十女が笑った。
湯ヶ野までは河津川の渓谷に沿うて三里余りの下りだった。峠を越えてからは、山や空の色までが南国らしく感じられた。私と男とは絶えず話し続けて、すっかり親しくなった。荻乗や梨本なぞの小

さい村里を過ぎて、湯ヶ野の藁屋根が麓に見えるようになった頃、私は下田まで一緒に旅をしたいと思い切って言った。彼は大変喜んだ。

湯ヶ野の木賃宿の前で四十女が、ではお別れ、という顔をした時に、彼は言ってくれた。

「この方はお連れになりたいとおっしゃるんだよ。」

「それは、それは。旅は道連れ、世は情。私たちのようなつまらない者でも、御退屈しのぎにはなりますよ。まあ上ってお休みなさいまし。」と無造作に答えた。娘達は一時に私を見たが、至極なんでもないという顔で黙って、少し恥かしそうに私を眺めていた。

皆と一緒に宿屋の二階へ上って荷物を下した。畳や襖も古びて汚なかった。踊子が下から茶を運んで来た。私の前に坐ると、真紅になりながら手をぶるぶる震わせるので茶碗が茶托から落ちかかり、落すまいと畳に置く拍子に茶をこぼしてしまった。余りにひどいはにかみようなので、私はあっけにとられた。

「まあ! 厭らしい。この子は色気づいたんだよ。あれあれ……。」と、四十女が呆れ果てたという風に眉をひそめて手拭を投げた。踊子はそれを拾って、窮屈そうに畳を拭いた。

この意外な言葉で、私はふと自分を省みた。峠の婆さんに煽り立てられた空想がぽきんと折れるのを感じた。

そのうちに突然四十女が、

「書生さんの紺飛白はほんとにいいねえ。」と言って、しげしげ私を眺めた。

「この方の飛白は民次と同じ柄だね。ね、そうだね。同じ柄じゃないかね。」

傍の女に幾度も駄目を押してから私に言った。

「国に学校行きの子供を残してあるんですが、その子を今思い出しましてね。その子の飛白と同じなんですもの。この節は紺飛白もお高くてほんとに困ってしまう。」

「どこの学校です。」

「尋常五年なんです。」
「へえ、尋常五年とはどうも……」
「甲府の学校へ行ってるんでございますよ。長く大島に居りますけれど、国は甲斐の甲府でございましてね。」
一時間程休んでから、男が私を別の温泉宿へ案内してくれた。それまでは私も芸人達と同じ木賃宿に泊ることとばかり思っていたのだった。私達は街道から石ころ路や石段を一町ばかり下りて、小川のほとりにある共同湯の横の橋を渡った。橋の向うは温泉宿の庭だった。
そこの内湯につかっていると、後から男がはいって来た。自分が二十四になることや、女房が二度と流産と早産とで、子供を死なせたことなぞを話した。彼は長岡温泉の印半纏を着ているので、長岡の人間だと私は思っていたのだった。また顔付も話振りも相当知識的なところから、物好きか芸人の娘に惚れたかで、荷物を持ってやりながらついて来ているのだと想像していた。
湯から上ると私は直ぐに昼飯を食べた。湯ヶ島を朝の八時に出たのだったが、その時はまだ三時前だった。
男が帰りがけに、庭から私を見上げて挨拶をした。
「これで柿でもおあがりなさい。二階から失礼。」と言って、私は金包みを投げた。男は断わって行き過ぎようとしたが、庭に紙包みが落ちたままなので、引き返してそれを拾うと、
「こんなことをなさっちゃいけません。」と抛り上げた。それが藁屋根の上に落ちた。私がもう一度投げると、男は持って帰った。
夕暮からひどい雨になった。山々の姿が遠近を失って白く染まり、前の小川が見る見る黄色く濁って音を高めた。こんな雨では踊子達が流して来ることもあるまいと思いながら、私はじっと坐っていられないので二度も三度も湯にはいってみたりしていた。部屋は薄暗かった。隣室との間の襖を四角く切り抜いたところに鴨居から電燈が下っていて、一つの明りが二室兼用になっているのだった。
ととんとんとん、激しい雨の音の遠くに太鼓の響きが微かに生れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com